

トピックス

特別展「ゆうちょ150年～はじまりからアプリまで～」の実施について

藤本 栄助

① はじめに

明治8（1875）年、郵便貯金が始まって以来、本年で150年となる。郵便の開業に遅れること4年である。「前島密」は「郵便の父」として著名であるが、郵便貯金の創業者としての知名度は低いではなかろうか。また、制度の創設としては同じでも、郵便貯金には、切手、郵便ポスト、制服のような、ビジュアルな要素に乏しい。本来、モノがベースとなる博物館の展示として、今回苦心したのもこの点である。150年は長いスパンであり、事業主体も、国（

逓寮、通信省、運輸通信省、逓信院、郵政省、総務省（郵政事業庁）から日本郵政公社、ゆうちょ銀行と移り変わっている⁽¹⁾。事業経営や経済的視点からも、勤儉貯蓄を訴えての出発から始めて、一般会計への寄与、戦時の貯蓄増強、戦後の財政投融资、金融規制下での市中銀行との預金獲得競争、金融自由化への対応、システムの改編等、大きな変化があった。この150年をどう振り返るべきか。

左のチラシは、ゆうちょ開業の年に、三代広重が描いた錦絵をもとにしている。明治に入ってから錦絵は、赤を多用すると言われ、空やタイトルの赤と橋の緑が対照をなし、期せずして「郵政レッド」と「ゆうちょグリーン」の取り合わせとなった。当時の東京、日本橋周辺の情景であるが、この辺りは、江戸時代からの水路で結ばれており、「あらめばし」と「江戸橋」の向こうに「第一国立銀行」と「逓寮」（絵には「郵便局」とある）が見える。それぞれのトッ



【図1】特別展のチラシ

プは、渋沢栄一と前島密であった。渋沢は、「国立銀行条例」の立案者である。銀行に必須の複式簿記の導入のため、大蔵省や銀行関係者の研修が行われ、郵貯開業を控える逓寮もその一員として、その流れの中にあつた。渋沢と前島は、かつて民部大蔵省の「改正掛^{かいせいがり}」で上司、部下の関係にあり、わが国の近代化に向けて、多くの共通課題をもっていた。この絵は、そのような時代と改正掛を場とする人間関係の象徴であり、今回展示の伏線となっている。

1 「郵便貯金」の名称は、「郵便貯金法」により定められたもので、郵政民営化によりその名称はなくなった。民営化で誕生した「ゆうちょ銀行」は、特別の法律により設立されたものではなく、一般の株式会社であり、金融法制のもとにある。今回、展示の名称を「ゆうちょ150年」としたのは、現在の会社が「ゆうちょ」の名を冠していること、「郵便貯金」が長年「郵貯」、「ゆうちょ」の名で親しまれてきたこと、リテールバンキングを基本とすることは創業以来変わらないこと、等を勘案したものである。

展示では、まず、創業に当たってどのような条件が必要だったかに焦点を当てた。およそ、銀行業務には、「お金」の存在が前提となる。これは自明のようだが、当時、わが国は通貨改革の途上であって、まだ江戸時代の通貨が用いられており、新しい貨幣の供給は準備の段階にあった。当時の多様な貨幣実物の展示を通じて、入館者は、江戸時代の「両」、「文」から「円」、「銭」への移行を実感できるであろう。これには、前島を含む改正掛のメンバーが深く関わっていた。

二つ目は、郵貯の開業が、金融史から見てどのように評価されるか、である。郵貯の開業は、それまで自己資本を貸す「金貸し業」しかなかったわが国に、他人のカネを預かって他者に媒介する本来的な「金融仲介業」成立の下地をつくっていった。そのためには、複式簿記が必要であった。前島は、明治4年に帰国後、直ちに郵便貯金を開始できなかったのは、「計算簿記」ができる者がいなかったからだと述懐している。郵貯創業時の苦労は、「宵越しの金ほもたない」庶民に、勤儉貯蓄の習慣をつけるという側面から語られてきたが、それは「貸方」（資産＝運用先）、「借方」（負債＝預金者）の概念と表裏の関係にあった。それ以降20年をかけて、「金貸し」でない「金融仲介業」としての「銀行業」がわが国に定着していく。郵政博物館には、明治13年当時の「^{そうかんじょうもとちよう}総勘定元帳」が残されていて、複式簿記の存在を確認することができる。

三つ目は、第一、第二に通底するテーマ、「計算」である。そのツールは、明治になっても、江戸時代から続く算盤だった。江戸時代の^{ぜに}銭計算は「^{くろくかんじょう}九六勘定」という複雑なもので、それを算盤で計算するための算術書が多く出版されている。この計算方法が、江戸時代の通貨から現在につながる「円」への移行に当たって、重要な役割を果たした。開業した郵貯にとっても、算盤計算は必須であり、当時の^{ていしんしやう}通信省貯金局は、それに従事する多くの女性の働く職場となった。その中から「^{そろばん}そろばんの天才」と称せられる女性職員が誕生するという、社会的なインパクトもあった。そこで、江戸時代から維新时期にかけて、どのような^{ぜに}銭計算が行われたか、また、郵貯の計算組織、システムがどのように変化して、今日の^{ゆうちょ}ゆうちょアプリにまで至ったかを振り返ることにした。



【図2】計算体験風景

これらを、「^{かいせいがり}改正掛の部屋」、「ロンドンの部屋」、「貨幣の部屋」、「ゆうちょの部屋」、「計算の部屋」の5つに分けて展示した。会期は4月26日（土）から6月22日（日）に及んだが、展示を要約あるいは補完する意味で、「明治8年ゆうちょ開業への道のり」、「幕末・維新期の銭勘定と新貨移行」と題して、2回の講演会を催したほか、江戸時代の銭計算を実体験するクイズコーナーを設けた。また、本年は、前島誕生から190年となることから、「前島コーナー」を設け、前島翁ならぬ「若き前島」の業績を振り返り、あわせて、当時の東京の風景を三代広重の錦絵で楽しんでいただくこととした。

期間中、向島郵便局による「記念小型印の押印サービス」、「ゆうちょペイのキャラクターペイレンジャーが博物館にやってきます」、「ゆうちょキャラクターの缶バッジ作り」、「ぬり絵ワークショップ」のイベントを実施した。また、ゆうちょの歴代キャラクターを展示した。

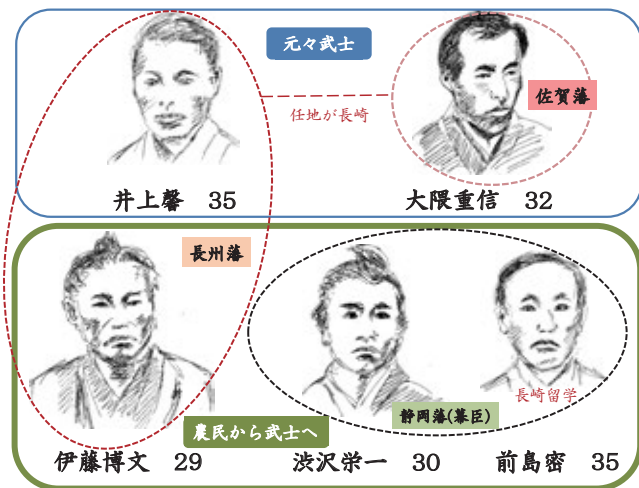
以下、それぞれの「部屋」に即して、展示のポイントを説明し、展示物等の画像を示す。

2 「改正掛の部屋」

改正掛は、渋沢栄一の提言をもとに、大隈重信が明治2（1869）年11月に設置した²⁾。当時の民部大蔵省は、2つの省が束ねられた、内政、財政を受け持つ強大な官庁で、掛のメンバーは、内務省と大蔵省の掛け持ちであった。ここに、有能な人材が集められ、日本の国の近代化に向けて、政策の調査・研究・立案を行った。いうならば、政府内シンクタンクである。渋沢栄一の談話『雨夜譚』は、次のような課題を掲げている。①全国測量の実施、そのための度量衡の改正、②租税の改正、③駅伝法の改良、④貨幣の制度、⑤禄制の改革、⑥鉄道敷設、⑦諸官庁の建築等。大隈をトップに、井上薫、伊藤博文のような政府開明派が陣取り、渋沢栄一が掛長であった。江戸幕府の役人だった人々が多く、渋沢栄一も前島密も、前島から駒通権正を引き継いだ杉浦義也も、政権を返上した徳川家に移った静岡藩から出て改正掛で活躍した人物である。展示では、今回のテーマ、貨幣に深くかかわる人物を5人ピックアップした。図3、下の段の3人は、もとは農家の出身で、異なる契機から武士身分を取得したが、改革の旗振りには、それが必要な時代であった。

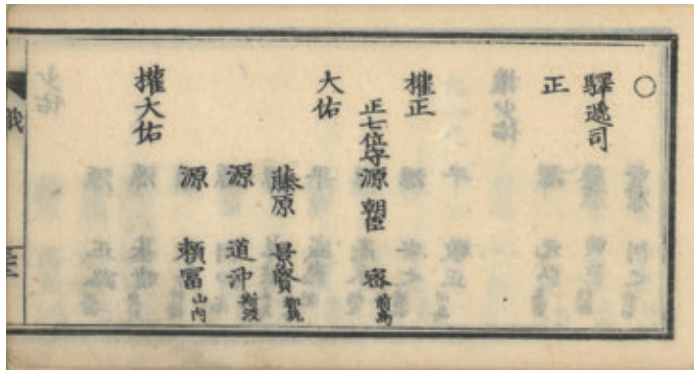
5人は、5者5様の貨幣との関わりをもっている。大隈は、維新当時、流布していた「偽二分金」の処理で諸外国との交渉の前面に立ち、名を挙げた。大蔵大輔（現在の「次官」に相当）であり、現在につながる「円」の生みの親である。伊藤は、それを受け、米國を調査して金本位制を提言し、銀本位制の流れを変えた。渋沢は、井上の指揮のもと、藩札を新貨「円、銭」に交換するルールを作ったほか、銀行制度の礎を構築した。前島は、租税権頭として、新しい紙幣（正式には「新紙幣」、俗称「ゲルマン紙幣」）を発注するために英國に渡った。前島が郵貯という制度を発見したのは、このときである。

改正掛に至るまでの彼らの貨幣にまつわる原体験は、さまざま面白い。最もお金に恵まれなかったのは前島である。父親が亡くなり、わずか12歳で江戸に留学した前島は、住み込みで写本するなどして生計を立てた。大隈は、幕府が横須賀造船所（製鉄所）の建設にフランスから借りた25万両の返済金を、大村益次郎の指揮する彰義隊の討伐資金に流用して、江戸平定に貢献した。井上と伊藤は英國公使館焼き討ちの罪から逃れるため、英國留学を画策し、長州藩から5千両を引き出した。井上ら、いわゆる長州ファイブの留学資金である。長州藩の資金が潤沢だったことが分かる。渋沢の実家は農家といっても藍商売に由来する多額の現金がある。当時、志士であった渋沢は、そこから無断で150両を高崎城襲撃の武器購入に充てた。襲撃は中止したが、追討の手が及ぶことを恐れ、その旨を父親に告げたところ、それを許しただけでなく、即金で二分金100両を京都への逃亡資金として用意してくれた。このような4人の金銭感覚は、前島とはかなり違っていただろう。しかし、金貨、銀貨の発行高が少ないなか、7,000



〔図3〕改正掛の5人（藤本作画）

2 明治5年12月2日までは太陰太陽暦である。



【図4】明治3年の職員録より（郵政博物館収蔵）

小さなものだったかを物語っている。図4は、明治3年、前島がごんのせい驛邊權正のときのものである。

3 「ロンドンの部屋」

前島は、正使、上野景範の「さしそえ差添」（随員）として、イギリスに出張した。郵便事業を起案してわずか半月後のことである。郵便事業の実際の準備は、改正掛の同僚、ゆづる杉浦讓に委ねられた。

杉浦たちは、6月以降、準備を重ねて、翌明治4年1月に郵便事業の布告、3月には実施にこぎつけた。その時の郵便は、飛脚をベースにしたもので、新しい点は、料金を切手で前もって払うことであるが、切手に消印することも知られていなかった。ところが、前島が乗船したのがアメリカの郵便船で、そこで消印を知り、杉浦に伝えたのである。図5が、前島らが乗船した太平洋郵便汽船会社の「ジャパン号」の絵である。



【図5】ジャパン号の絵
(<https://hdl.huntington.org/digital/collection/p9539coll1/id/12401>による)

出張の目的は、ふたつあった。日本政府は、イギリス人、ネルソン・レイと鉄道建設のため個人からの借り入れの形で契約していたが、レイはこれをロンドンで公募して、その利息のさやをとって儲けようとしたとされている。この契約を解約する交渉がひとつ目である。ふたつ目は、「新紙幣」の発注である。政府は、維新直後、太政官札を大量に発行したが、銅板刷りのため、偽造が容易であった。これに代わるものとして、円、せん銭の新貨表示で、かつ新技術を駆使した「新紙幣」（ゲルマン紙幣）の製造をドイツ、フランクフルトにあるドンドルフ&ナウマン社と契約することになったのである。これは、前島がもともと考えていたことだった。相手方はドイツの会社だが、契約行為は英国で行われた。前島は、本務の合間にイギリスの郵便と貯金を調査し、貯金にも強い印象を受けた。かつて、郵便の開業は、前島が英国で学んだことを帰国後に我が国に移植したと受け取られることがあったが、これは誤りであり、前島が飛脚を下敷きに起案したものを杉浦が肉付けして始まったものである。前島が英国から新たに持ち帰ったのは「郵便貯金」と「郵便為替」である。

前島は1年ほどロンドンに住んだ。前島が住んだ下宿が現在も残されていると伝えられ、最近の写真がある（図6）。また、滞英中の1871年はイギリスの国勢調査の年に当たり、その資

料に前島の名がある。住居は、ロンドンのケンジントン（Kensington）地区、ラドブロク通り（Ladbroke Bd）にあるアパートのモルトビィ（Maltby）氏宅、職業は家庭教師（Private Tutor）、前島の名前はHisoka Mayesimaで出ており、職業は日本国公務員（Japanese Civil Officer）とある（図7）。

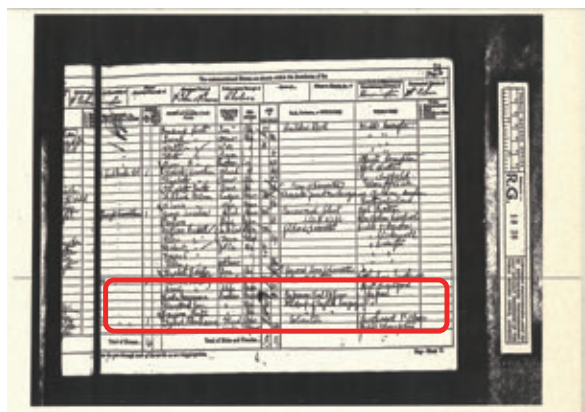
前島らの出張中に、国内では、郵便の開業、新貨条例の制定、廃藩置県、藩札交換の準備が行われていた。明治4年は、大改革の年であったが、それには、改正掛のメンバーの働きが大きかった。



〔図6〕 前島の下宿と目される建物（菊池勇治氏撮影）

4 「貨幣の部屋」

明治4年5月、新貨条例によって、通貨の単位が今と同じ「円」に変わった。それまでは、時代が明治となっても、江戸時代の貨幣が用いられていた。江戸時代のお金には、小判などの金貨、丁銀のような銀貨、それに銭貨（穴あき銭の銅銭や鉄銭）があった。これを金、銀、銭



〔図7〕 前島の氏名のある国勢調査票（菊池勇治氏提供）

からなる「三貨制度」という。三貨には上下関係はなく、それぞれが、いわば本位貨幣で、あたかも外貨のように、相互に相場が立っていた。しかし、明治元年の「銀目廃止」により、用いられる通貨の単位は、金貨（一分銀、一朱銀はその代用品）の、「両、分、朱」と銭貨の「文」に限られることになった。

このうち、分りにくいのが銭貨、「銭」である。銭1枚の価値は低いので、携帯、運搬、行使の便から、「緞」という紐や縄に結わることが行われた。図8は、今回、展示用に実物の一文銭96枚を差し通して作成した「百文緞」（上が銅銭、下が鉄銭）である。緞の下にある



〔図8〕 百文緞とバラ銭（個人蔵）

のは、緞を通さないバラ銭（散銭）である。この「百文」にも地方によって違いがあり、96枚の一文銭の地域と100枚の一文銭の地域に分かれていた。96枚の場合、これを九六勘定（九六銭とも）といい、100枚の場合、調銭といった。一文銭は江戸時代を通じて寛永通宝だったが、銅不足から鉄銭が発行されるようになり、幕末になると、鉄銭の1文は、銅銭1文の価値がな

く、慶応4年の太政官布告では、寛永通宝銅一文銭1枚が鉄一文銭12枚の価値とされ、同一文銭8枚が百文銭の天保通宝^{てんぽうつうほう}に当たるとされた（つまり「百文」=鉄銭96文の価値）³⁾。

それに加えて、各藩が発行した、藩限りで流通する「藩札」という紙幣があり、明治時代に入っても発行が続いた。藩札は、大量発行のため価値が下落し、額面どおりでは通用しないものが多くあった。また、明治政府は、両、分、朱単位の「太政官札」という不換紙幣を大量に発行し、政府の直轄地である府県は「府県札」を、新たに設立された「為替会社」は「為替会社札」^{ほうかざくらん}を発行した。このように、多種多様な貨幣が存在し、混乱した状況は、「宝貨錯乱」と呼ばれている。

5 「計算の部屋」

藩札は藩の債務であったが、明治4（1871）年7月の廃藩置県によって、新政府は、銀何匁、銭何文といった表示の藩札を、新貨の円、銭に交換する責任を負うことになった。果たして政府が藩札を引き換えてくれるかどうかは、国民の関心事であったろう。7月の廃藩置県に向け、「そのことを明示するように」と渋沢に厳命したのが井上馨である。前島がイギリスから帰国したのが同年8月だから、その直前である。換算方法等、具体的な交換ルール（「算則」という）が定められたのは、同年12月であり、この頃から、前島らが発注した「新紙幣」が到着しだし、翌年から交換が始まった。すでに改正掛はなくなっていたが、その旧メンバーの手で、新貨への移行が成し遂げられたのである。このときの交換ルールでは、九六勘定の銭は、調銭に置き換えて割り掛けの計算を行うこととされた。1両=1円で新貨との交換を行うが、1円=十二貫五百文の相場が九六勘定の藩の基本的な交換レートであり、これ以上の銭高相場では、百文=8厘（一貫文=8銭3厘）に固定され、銭安相場、例えば十三貫文だと、額面をこの相場

割る形で、比例的に減額された。一方、調銭藩のレートは基本が十二貫文（一貫文=8銭3厘）である。8:8.3≒96:100から、九六勘定の一貫文は調銭の0.96の価値しかないのが分かる。したがって、九六銭百文=96文の価値である。

左図（右側）の高知藩「銭壹貫文」札の上部には、朱肉で「三銭大蔵省」の押印がある。これは、新貨（一銭、二銭の銅貨）が間に合わないため、藩札に押印して新貨として通用させた臨時の措置である。九六銭藩である高知藩の銭札相場は、1両=36貫文だった。これを調銭に直して計算すると、 $(1000 \times 0.96) \div (36000 \times 0.96) = 0.0277\dots$ 円。これがルールにより五捨六入で3銭となるのである（一貫文単位だから、0.96は分子分母で



〔図9〕松江藩札と高知藩札（個人蔵）

3 漢字の百、アラビア数字の100、96を書き分けていることに注意。「百」は表記であるが、その価値は地方により100文、96文と異なっていた。



〔図10〕江戸時代の算術書（個人蔵）

示されている。ここでは、貞享期の『新板塵劫記』^{しんばんじんこうき}（吉田光由著の『塵劫記』に対する増補版）、文政/天保期の『算法新書』^{さんぽうしんしょ}（長谷川寛著）等、数点を展示した。江戸時代は、相場によって金、銀、銭の価値が変動し、三貨相互の換算が面倒だったことは、これらの算術書の例題を見ると分かる。

打ち消されるが、鹿児島藩札のような48文札は、相場九六銭31貫文のもので、 $48 \div (31000 \times 0.96) = 0.00161 \dots \approx 2$ 厘となり、48はそのままに、36,000は調銭化が必要となる。九六銭「百文」は100文の価値であるとしばしば誤解されるが、藩札交換の算則をみれば、当時96文の価値だったことは明らかである。

また、このことは、江戸時代に出版された日用算術書にも計算手順として

6 「ゆうちょの部屋」

前島は、以前から、郵便で現金を送るのは問題があるので、よい送金方法はないかと考えていたところ、ロンドンで本を手に入れて、郵便為替を知り、実際に郵便局で利用して、その便利さに感心した。帰国後、明治5（1872）年の春には、規則を立案したが、すぐには実施できなかった。現金の受けと払いが別の局で起きるから、払いの資金の用意が必要となる。そのリスクを考えた井上馨の反対によるものだった。当時、簿記を知る者がなかったことも障害だった。明治7（1874）年、大隈重信の了解により、国庫から10万円の為替資金が得られたが、それでも十分でなかったので、郵便取扱役^{とりあつかいやく}（郵便局長）から私金（個人のお金）を利子を付けて借りるなどの工夫が必要だった。しかし、明治8年1月に業務を開始すると、出だしから好評で、1年間で払出11万5,000件、払出金額は212万円に及び、「郵便為替」は、広まっていった。

「郵便貯金」も、明治6（1873）年には規則を立案したが、計算簿記の問題と預金の運用について協議が調わなかったことによって実施が遅れ、明治8（1875）年の5月2日、試行的に東京の18局、横浜の1局から始まった。預金の運用については、当初「大蔵省国債局」に任せたいと思ったが、協議に応じてもらえず、第一国立銀行に委託することとなった。第一国立銀行は、渋沢栄一が大蔵省時代に立案した「国立銀行条例」に基づくもので、渋沢は、当初総監、このときは頭取となっており、ここにも「改正掛」からのつながりが感じられる。「国立銀行」とは、国の法律に基づくという意味で、実際は私立である。国立銀行設立に向けて、銀行簿記の学習が始まったことは冒頭に触れたが、これが複式の「シャンド簿記」で、明治6（1873）年に『銀行簿記精法』が出版されている。シャンドはスコットランド出身の銀行実務家で、親切に簿記を教え、慕われた。



〔図11〕晩年のシャンド（藤本作画）



[図12] 明治13年 総勘定元帳差引残高記入帳 (郵政博物館収蔵)

明治8年(1875)から官庁簿記の改正が進められ、12年(1879)7月から複式簿記となり、11月には府県にも通達された(『大蔵省沿革略誌』)。明治5年から始まった藩札交換は、最終的に明治11年までかかったが、この頃には、大方の交換を終えていた。預金の元となる貨幣(紙幣)が十分に供給されたことになる。このような時期に、帳簿組織を備えた「郵便振替」や「郵便貯金」が誕生したのである。明治13年の郵便貯金の「総勘定元帳差引残高記入帳」を見てみよう(図12)。革表紙の立派な帳簿であるが、中身はほとんど脱落している。幸いなことに勘定科目の欄が残っており、見開きの左ページが貸借対照表で、右ページが損益計算書である。それぞれ、貸方、借方を計上し、差引残を計算する。

この複式簿記と、預金者集めの苦労が同じ盾の両面だったことは、すでに述べた。ここでは、預金集めの苦労を紹介しよう。前島が言うには、「元来、宵越の銭は持たぬと誇っている江戸^{かたぎ}気質で、一般に貯蓄の習慣に乏しい日本国民であるから、郵便貯金の趣旨も容易に徹底せず、しばらくの間は、預金者が全くないという有様」だった。当時の新聞に、前島^{えきていのかみ}駅通頭の名前で出された公告文(郵便貯金開業の趣旨)は次のように要約できる。

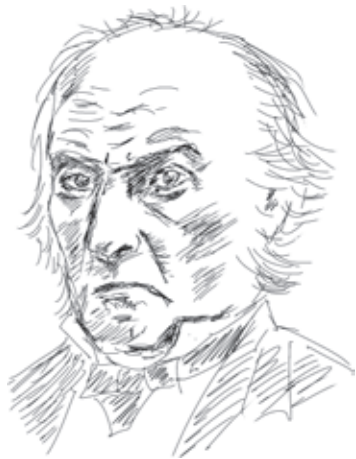
- ① 国民が節約の気風をもち、余裕があれば貯蓄をするのがよい
- ② そうすれば、病気になったり、年をとって親族がなくなった場合でも、困窮しない
- ③ 産業資本の育成にもなる
- ④ 10銭以上で預けることができ、元利が増え、いつでも受取ができ、安全である

節約の気風を養うとともに、社会政策的な色彩をもっている。駅通局では、様々な勧誘策を実施した。駅通寮の職員と打ち合わせて、幾らかの拠金を集め、10銭から20~30銭を1,000名の庶民に与えて、すぐ貯金として預けてもらうとか、貯金預金者数名を誘った人には、いくらかのお金をあげるなど、必死に努力したが、効果は「非常に少なかった」と前島は言っている。

明治5(1872)年に国立銀行条例が施行されたが、それ以外に、数年後には、1,000社に及ぶ私立銀行、銀行類似会社が発生した。



[図13] 深川郵便分局における勧奨模様 (郵政博物館収蔵、守屋多々志画『前島密業績絵画』より)



【図14】 グラッドストーン
(藤本作画)

これらは、資金の多くを株式の形で調達するもので、預金をベースとする商業銀行とは異なるものだった。つまり、民間資金を広く集めてそれを貸す「金融仲介業」ではなく、自己資本を貸す「金貸し」の業態だった。しかし、20世紀を迎えるころには、銀行資金に占める民間資金の割合が高まっていった。その要因として、現金、個人間貸付に替わる新しい価値の貯蔵手段として、預貯金に関する認識が深まったことがある。これには、「郵便貯金制度の普及を中心とする政府による勤儉貯蓄奨励運動があずかって力があつたろう」とされている(寺西重郎「明治期における銀行の成立について」)。このようにして、郵便貯金は、リテールバンキングのさきがけとなったのである。郵便貯金の始まりは、前島が実際に体験したイギリスにある。1861年にグラッドストーン(当時大蔵大臣)が、銀行へのアクセスをもたなかった国民の多くのために、便利な貯蓄の方法として、郵便局を通じた全国的な貯蓄システムを立ち上げた。これはまた、公債を安くファイナンスする方法でもあった。産業革命とともに、貯蓄を集め、当時、大方が銀行と関わりがなかった市民に支払い方法を提供する、という使命は、イギリスにおいて、郵便事業の本来の役割であった。

郵便貯金は、当初、単に「貯金」といい、のち、他と区別するため、「逓信局貯金」となった。業務試行の明治8(1875)年末には、預入人約1,800人、貯金額約15,000円にすぎなかったが、明治28(1895)年の日清戦争後、経済が一時活発となり、郵貯の貯金額も増加した。その後、反動減となったが、景気の回復と貯蓄奨励の結果、挽回傾向となり、明治37(1904)年の日露戦争に伴って、人員、金額とも大きく増加した。明治時代の終わりには、「預金人員」が1,000万人に達した。

これに伴って業務量も増加したが、現在と違い、計算、記録するには、算盤による手作業しかなく、多くの職員を要した。明治40(1907)年には、大規模な「貯金局」の建物が東京銀座木挽町に建設された。そして、明治44(1911)年には、全国から1,000余人の職員と多くの来賓を集めて、貯金局の間口18m、奥行き54mという大事務室で「珠算競技会」が開かれた。右上は展示室の壁面に大伸ばしにした競技会の模様の写真である。



【図15】 珠算競技会の模様(写真は郵政博物館収蔵)



【図16】 算盤と歴代窓口端末(算盤及び端末2台は郵政博物館収蔵、右端の端末は(株)ゆうちょ銀行所有)

話は一気に戦後に飛ぶ。昭和53(1978)年までは、オフラインのEDPS(Electronic Data Processing System)処理であったが、昭和50(1975)年から、オンラインサービスが企画され、5次にわたるシステム更改が行われた。ゆうちょシステムの歴史は、巨大さのとの戦いの

歴史と言われることがある。現在、管理口座数は通常貯金で約1.2億口座あり、その口座にアクセスするチャンネルとして、全国に張り巡らされた店舗が約2.4万店、ATMが約3.1万台、ゆうちょ通帳アプリの登録数が約1,200万口座ある。これらのチャンネルから、一日あたり約3,000万件のオンライン取扱が発生しており、一金融機関のシステムとしては、わが国でも最大のものとなっている。



〔図17〕初期の通帳（郵政博物館収蔵）

郵政博物館に収蔵された通帳を見ると、処理方法によって形や名称が変化している（図17）。最初の通帳は、「郵便預渡通帳」の名称で明治11年～14年のもの。これが「郵便貯金通帳」に変わり、その次の「郵便貯金通帳」は、明治18（1885）年～昭和53（1978）年の長い年代にわたり用いられた。この間、昭和42（1967）年に、為替貯金窓口会計機を使用することになり、新しい形

の冊子式となり、縦長となった。その後、オンライン化に伴い、磁気ストライプが通帳につけられ、名称も昭和56年には「郵便貯金通帳オンライン」となった。その後「郵便貯金総合通帳オンライン」、「ぱ・る・る 郵便貯金総合通帳」、「郵便貯金総合通帳」となって、現在の「総合口座通帳」に及んでいる。

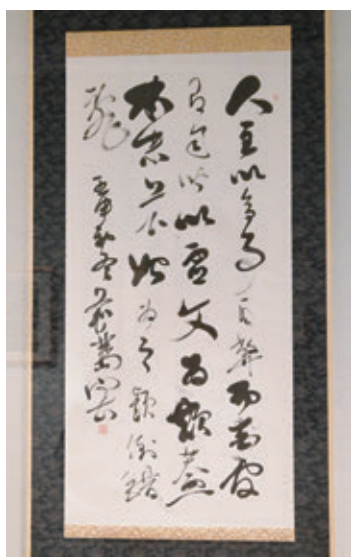
右の写真は、ゆうちょのキャラクターコーナーから前島コーナーに向けて撮ったものである。左手前に公社時代からの「ますますくん」があり、ガラス面に錦絵が写り込んでいる。錦絵は、三代広重を中心としたもので、ゆうちょ創業の明治8年前後の



〔図18〕キャラクターコーナーから前島コーナーへ

東京風景である。右手前に見えるのは、ゆうちょの年表である。

前島コーナーからは、1点だけ紹介しておこう（図19）。明治5（1872）年と、当館収蔵の前島揮毫のうち最も古いものである。大意は次のとおりである。「君主は為すべきことが多く、そうでなくとも疲れるものである。なのに多くの官僚は無駄な文章を作って煩わせていると聞く。思うに、大事なことも細かなことも、上司も部下も、このためひっくり返し乱れてしまうのである。」このとき前島はすでに30歳代半ばであったが、晩年の枯れた書とは趣が異なり、潤いのある筆致で始まり、興が乗ると筆が走り、「前島密」と大きく結んでいる。意思決定の早い、合理主義者の面目一如たるものがある。これも明治初年という時代の若さを示すものだろうか。



〔図19〕前島の揮毫（郵政博物館収蔵）

7 まとめ

ゆうちょの開業は、郵政事業史の一コマであるが、一般的に語られる機会は、さほど多くない。また、郵便に比べて「モノ」の展示も難しい。このため、説明パネルが40枚に及んだが、どのように理解されたか、気にかかるところであった。しかし、51日の開催期間中、9,376人の入場者があり、アンケートの限りでは、一定の理解が得られたように思われる。展示の関係者、入場された方々に感謝申し上げたい。

(ふじもと えいすけ 郵政博物館特任研究員)